

アペックス便り11月号

令和4年 11月吉日

おしらせと今月の行事予定 ※助成金対象の拡大!!

大阪市塾代助成事業の対象学年が令和5年の4月より、小学5年生～中学3年生まで対象生が拡大します!!当教室は助成事業の認定教室です。詳細は[大阪市塾代助成]を検索して資格要件、申請方法など確認して下さい。毎月の塾代の助成金が支給されますので、対象生徒は必ず申請しましょう!!

※12月より申請受付開始!お早めに!!

今月の予定

- 26日…全国テスト
対象…非受験生(小/中)
- ◎進路相談実施中(要予約)
- ※中学3年受験生の受験校に関する事前相談を、随時実施しますので必要な生徒、保護者は必ず日時予約の上、ご相談下さい。

塾長の呟きブログ

前回の続き ～少年期の出逢い Part②～

当時の公立中学は道徳教育も盛んで、特に週に一度は[にんげん]というテキストで、同和差別の授業もあったぐらいだった。本名で通学する私への配慮なのかどうかは分からないが、学校の先生は二手に分かれるぐらい、私には両極端な扱いが垣間見られた。

越境入学者が多かった程の人気進学校で、当時はトップ高に毎年50人以上の合格者を出す中学校であった。教育熱心な家庭が多い為か雰囲気は少し異様で、大半はがっかりか残り落ちこぼれか、あとは僅かなヤンチャな不良予備軍だった。私はというと、入学早々から勉強に挫折したので、学力競争は戦線離脱の状況でもつばらヤンチャグループのリーダー格を装い、学校生活を謳歌していた。しかし、あんな大袈裟な希望と覚悟を持って転校したのに、小学時代の恩師や両親の期待にも応えられない自分に、内心ではイライラと忸怩たる思いで一杯だった。

俺だってやれば出来るさ…』と嘯きながらも全く勉強をしないので、相変わらず成績は低迷し仲間とヤンチャばかりしていた。ところが、あるひょんなことから、転機が中二の秋に突然訪れた。後の恩師になる先生との出会いで、私は背中から押された様に、突如やる気が湧いてきたのだ。その先生はとても厳しく、生徒からは恐れられた先生だった。皆は煙たがったが、なぜか先生は私に関心を寄せ、珍し授業中に私を良く褒めてくれた。私も素直に、心を開いた鼻根の先生だった。理科の先生で、ある放課後、実験後の片づけを手伝わされた二人だけの時に、私は先生から、何気なく(将来の夢や進路を尋ねられた。間髪入れず素直に、将来は医者になりたい』とアッサリ答えた自分が恥ずかしくて、直ぐに『でも、勉強できんから、無理やと思う…』と打ち消したら、『いや、お前だったら良い医者になると思うよ。それならば、そろそろ本気で勉強しないと

高校受験に間に合わないよ…、今からでも遅くないから、頑張ってみろ!』と否定どころか、更に勉強で分からない所があったら、放課後いつでも教えてあげるから、まず学年100番以内を目標に頑張れ!』と私の夢を真剣に受け止め、後押ししてくれたのだ。

私は嬉しくて、絶対に100番、いや50番以内になってみせます!だから見とってください!』と勢いに任せ、先生に言い放っていた。約束した以上、もう後には引き下がれない…。『し、やってやろう!』と私は先生から言い知れぬ勇気を貰って、全身から溢れるやる気に燃えて、その日から生まれ変わったように勉強に打ち込んだ。その日以来、周囲のヤンチャ仲間にはがっかりになる宣言をして、遊びや誘いも断り、勉強に明け暮れる毎日が始まった。

『一せ、最初だけやわ…』と令やかす落ちこぼれ仲間や、ヤンチャ仲間の眼差しも背中に感じていたが、まさに最初の三日が勝負だった。やがて三週間、そして三か月と時間が経つにつれ、自分の立ち位置は大きく変化してきた。当時の中学校では学年100番以内は公表していたが、三学期の学年末テストで私はいきなり50番以内になって、恩師の先生との約束を果たすことが出来たのだ。そんな快挙もあって、嘲笑していた仲間も、テストが近づくと、まるで自分のことのように興奮しながら、勉強する私を応援するようになってきた。私の学習法は至って簡単だ。まず教科書の隅々の挿絵に至るところも全てを、とことん分かるまで精読することから始まり、さらに理解できているかどうかの確認を、徹底的に問題集でチェックする方法だ。それを絶対に自力で正答するまでは、最低三回は誤答チェックを消すこととして、全問題を自力で解ききるまで反復し、ひたすら繰り返すだけだ。簡単に言えば、問題用紙に絶対に嘘はつかないと徹底して臨んだ。テストに関しても、解答欄に嘘はつかないばかり分からない問題は空欄でも、解ける問題は絶対に取りこぼし無く記入して、得点を加算していく方法だ。最初は空欄も多いテスト用紙が、勉強の量と分かる量が増えてくると、面白いように空欄のスペースが減っていくので、ますます勉強が楽しくなっていた。小学校から読書三昧で過ごしたことも寄与したのか、教科書を精読しながらの理解のスピードも速かったのだ。勉強の量だけでな(質も上がると、いろんな工夫も加え、更に自分なりに分析し、検証する楽しさも覚えた。分かりやすく言えば、同じビデオ映画を擦り切れるまで観れば、見落としていた部分も良く見え、更には作品内容の製作意図まで気付くといった感じだ。今、我が教室で子供たちに指導する方法は、自分の原体験によることも多いが、勿論一番大切なのは目標とモチベーションとの理由付けであることは言うまでもない。私の場合、恩師の励ましで勉強する目標と動機を得て、さらに医者になる為の絶対条件で勉強は絶対に必要だと、正面から自身と向き合うことができたので、全神経を勉強に張り巡らし集中しただけだ。本気で勉強と向き合い、自信を深め、更に意欲と希望が湧くに従って、学習する善の循環が動き始めたのだ。その意味で、思春期の大人の子供への一言は本当に重要だと思う。勇気を与えるか、絶望させるかは、ほんの紙一重の違いと言えよう。大人の一言で、人生が変わるのだ…。

そんな勢いで、受験学年の三年生を迎える時は、私の勉強意欲は増すばかりで、一学期のテストは、学年順位も遂に一桁まで伸ばすことができた。面白かったのが、周囲の目と態度が激変したことだ。これまでは親から私と遊ぶことさえ禁止されていた者や、上位安定していたがっかりくんたちも、不思議と私に近寄って来るようになってきた。私自身は、これでやっと両親に面目が立つ、と安堵したのだが、第二の転機がよもや高校進学の際に訪れようとは、その時は未だ気付いていなかった。当時の高校受験は公立高校全盛で、しかも各学区に分かれた高校の序列が明確であった時代だった。 [裏面につづく]